

# 3 心の母

1960(昭和35)年、カネは68歳で亡くなりました。脳出血で倒れ、自宅療養した末のことでした。療養中は、家にいた妹の佐代子がおもに看病しました。民子と交流があった、歌人・北沢郁子氏は、ある日、佐代子が介護の辛さを民子に打ち明けた際に「もう少しだからね」と、母の死がそう遠くないような発言をしたことを後悔していると、民子から聞いていたそうです。



写真「晩年の母・カネと、妹・佐代子」(No.16)



写真「晩年の民子」1992年2月29日撮影(No.22)

当時の民子の短歌には、常にカネへの深い愛情が感じられます。自分が年を重ねようとも母はいつまでも母であり、民子はいつまでも娘だったのでしょ。母親から受けた愛情と、母親への思慕が優しく歌に詠み込まれています。

民子自身は母親似であったこともあり、年齢が晩年の母に近づくにつれて、容姿も似てきたと感じていました。また、ものごとの捉え方などの内面にも母への共通点を見出していたようです。家族を亡くしてしまった民子ですが、胸の中には母が生きていたのです。

## 参考文献

- 『大西民子集—現代短歌入門(自解100歌選)』大西民子/著 牧羊社 1986年
- 『回想の大西民子』北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
- 『評伝 大西民子』有本俱子/著 短歌新聞社 2000年
- 『まぼろしは見えなかった—大西民子随筆集—』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年

## 大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で逍空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2023年1月7日  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1  
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460



# 母に受けたる大きたまもの



2023年1月7日(土)~3月4日(土)

No	種別	内容
1	自筆原稿	「夜の音」大西民子 筆
2	日記	夏季休暇日誌
3	写真(複製)	母・カネ
4	自筆歌集	『寂天莫地』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「つやゝかに母にみがいれ紅りんご北の海辺ゆ送られてきぬ」
5	自筆歌集	『むろ咲きの菜種の花の』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「母上はいかにおはすや學び舎は金木犀 <small>きんもくせい</small> のはなにほふころ」
6	写真(複製)	民子と同級生たち 奈良女子高等師範学校にて
7	自筆歌集(写真)	『むろ咲きの菜種の花の』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「病みがちの父を守りて老いたまふ母のすがたは崇 <small>たか</small> かなしき」
8	自筆歌集	『歌集 はるのワルツ』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「子のをらぬ家客間の箱ピアノは今日もひっそりはにまもられ」
9	自筆歌集	『回顧一年』(大西民子手作り歌集)より 掲載歌「宵の灯に疲れて一人うたゝねをなり給ふらむ母の恋ひしも」
10	自筆原稿	「殻 <small>すく</small> とぢて竦める如き日のわれを不意に來し母に見せてしまひぬ」
11	自筆原稿	「耳遠き母も漸 <small>ようや</small> く住み慣れて坂くだり買ひ物にゆくを楽しむ」
12	自筆原稿	「冬となる日々ながく病院に通ふべき母のため今宵も脚絆編みつぐ」
13	自筆原稿	「集め毛糸の脚絆なれどもはきて見つつ母の眼に光る涙を見たり」
14	自筆原稿	「北の故郷に住みて死にたしと思ひいます母と知れど誰も触ることなし」
15	自筆原稿	「わが通ふ道の下草刈り呉れよ露しげき夜のまぼろしの母」
16	写真(複製)	晩年の母・カネと、妹・佐代子
17	自筆原稿	「亡き母のくちずさみりし数へ唄古毛糸つなぐをりふしに恋ふ」
18	自筆原稿	「糖蜜を煮詰めて雪の日をこもり母ありし日のごとガラス曇らす」
19	自筆原稿	「白湯 <small>さゆ</small> といふ母の言葉のよみがへり冷むるを待ちてもろ手にかこむ」
20	自筆原稿	「病みあとの髪梳 <small>かみ</small> きをれば口紅を塗らぬ顔いたく亡き母に似る」
21	書籍	『光たばねて』大西民子 著 1998年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌「喉元 <small>のどもと</small> をすぎて忘るわが性は母に受けたる大きたまもの」
22	写真(複製)	晩年の民子(1992年2月29日撮影)

# 民子のエッセイ“夜の音”

「短歌研究」1985年1月号より

母の没後25年にあたる1985年、<sup>おおにしだみこ</sup>大西民子(本名:<sup>かんのたみこ</sup>菅野民子)は「思うことを自由に書いてほしい」という出版社からの依頼を受けて、母・菅野カネについてエッセイを書き上げました。このエッセイでは、母との食事の思い出や、教えられたことが今も自分の中に息づいていることを綴っています。

民子はエッセイの最後に、母に向けて歌を一首を詠んでいます。

「まだ母のいましころは夜の音をはばかりて小声にものを言ひみき」



自筆原稿「夜の音」(No.1)

## 1 故郷の母

民子の母・<sup>かんの</sup>菅野カネは1891(明治24)年福島県二本松市に生まれました。民子によると、父・<sup>かんのさすけ</sup>菅野佐介とカネは親戚同士で、結婚に反対されたのを機に、新天地を求め盛岡市に移り住んだそうです。そのため、民子は両親について「<sup>かけお</sup>駆落ち夫婦」と周囲に語っていました。



写真「母・カネ」(No.3)

カネは刑事として働く夫を支えながら、民子たち3人の娘を育てます。民子によると、カネは愛情深い母親でしたが、娘の立場からすると時に息苦しさを感じることもあったといひます。

民子が盛岡高等女学校生だった時、父の転勤のため菅野家は盛岡を離れることとなります。転校したくなかった民子は、ひとり盛岡で知人の家に下宿し、戦後に岩槻で一緒に住むまで、民子とカネは離れて暮らしていました。民子が、まだ学生で奈良の女子高等師範学校に通っていたころは、故郷から遠く離れて暮らしていたこともあり、母を恋しく思っていたようです。



(左)自筆原稿(No.5) (右)手作り歌集『むろ咲きの菜種の花の』表紙

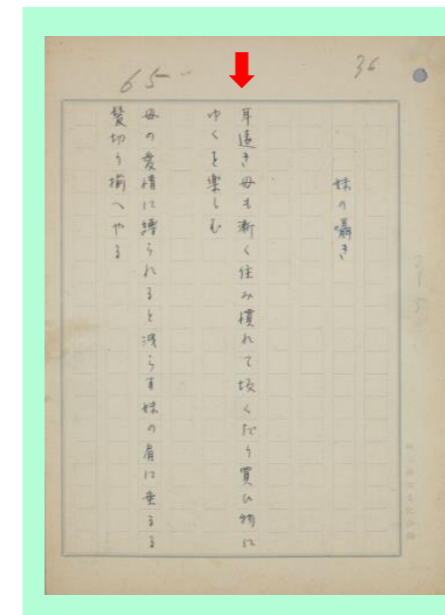
「母上はいかにおはすや學び舎は <sup>きんもくせい</sup>金木屋のはなにほふころ」(No.5)

金木屋は秋に開花し、その花は強い香りを放ちます。植えられているのは、本州の関東以西に多いため、盛岡で育った民子には馴染みがなかったのかもしれませんが、奈良の学校にある金木屋の香りに包まれながら、遠い地にいる母を想い詠んだ歌です。

## 2 身近な母

1945(昭和20)年1月に、夫・佐介が亡くなると、カネは佐介の最後の赴任地だった高田町(現・陸前高田市)に末娘の<sup>さよこ</sup>佐代子と残りました。当時、民子は釜石市で教員をしており、1947(昭和22)年にカネの反対を押し切り同じ教員の<sup>おおにしひろし</sup>大西博と結婚することになります。

その後、民子は博とともに大宮市に移り住み、のちにカネも佐代子を連れて岩槻市に転居しました。カネは、埼玉の暮らしに戸惑いもあったようですが、耳の手術を乗り越えて新しい暮らしにも慣れていきました。



自筆原稿「耳遠き母も漸く住み慣れて坂くんだり買ひ物にゆくを楽しむ」(No.11)

しかし、内心では長年暮らした東北に帰りたいという気持ちも抱えていたようです。民子は、そんな母の心境を理解しつつも叶えられないことに歯がゆさを感じていました。

「耳遠き母も<sup>ようや</sup>漸く住み慣れて坂くんだり買ひ物にゆくを楽しむ」(No.11)

「北の故郷に住みて死にたしと思ひいます母と知れど誰も触ることなし」(No.14)